

2024 年 度 自 己 評 価 結 果 報 告 書

—教 職 員 編—

1 本園の教育目標

一 心豊かな思いやりのある子どもに

二 自ら考え、自ら決め、進んで行う子どもに

◎明るく潤いのある子ども ◎思いきり遊べる子ども ◎話をしっかり聴く子ども ◎調べたり、試したり、工夫する子ども

- 1 人との関わりを通して、基本的な生活習慣・態度及び健全な心身を育成することの必要性に気づき、自ら進んでその態度・意識を高めようとする意欲を育む。
- 2 自己発揮と自己抑制との豊かな調和がとれた自律性を養う。活動と休息、開放感と緊張感、動と静などの調和を保った健康的な生活リズムを保障する。
- 3 自然と豊かに関わることを通して、その不思議さ等に気付いたり、科学的認識を高めたり、昆虫などの生命ある小さきものをいとおしむ態度を培う。
- 4 心の働きの表れである『ことば』を大切にし、喜んで話したり、聞いたりする態度を養う。
- 5 多様な感動体験を伴う生活を通して、より豊かな感性を培い、創造する力、想像する力を豊かに育む

2 本年度の重点評価項目、評価結果、取組・達成状況

重 点 評 価 項 目		評価 結果	取 組 達 成 状 況
分 類	内 容		
保 育 の 計画性	成長の連続性を重視した担任間の定期的な話し合い 3 歳、4 歳、5 歳の成長の連続性を重視し、子どもの発達を支えるため前年度と現年度の担任が定期的に話し合う機会を設ける。	A	・年度初めの申し送りの他、日々の保育の中で、前担任と話し合う機会を設けてきた。また、課題や気になること等については、その都度、前年度の様子や対応などを話し合ってきた。
	集団の一員としての自覚を育てる 多少の制約を受けながらも、子どもが集団の中で一員としての自覚を持てるように導く。	A	・集団で活動する心地よさを感じ、集団の一員として行動できるように個々の気持ちに寄り添いながら援助してきた。
	自立的な態度の形成を支える 教師の指示ではなく、子ども自身の「必要感」に裏打ちされた自立的な態度を育むため、日々子どもたちと関わりを深めている。	A	・活動や行動の理由を分かりやすく伝えたり、自ら進んで行えるような環境を整えたりしてきた。また、自分たちで決めたことや自分に任されたことなどを通じて、自ら気付き行動する姿に繋がった。更に自立的な態度を育む為、寄り添っていききたい
	自律性を育む保育の実践 自己発揮と自己抑制のバランスがとれた自律性を養うことを目指し、幼児が主体的に関わり、安定して遊び込める環境を活動の展開に応じて再構成している。	A	・子どもの教師関心を基に環境を整えてきた。子どもの気持ちに寄り添いながら相手の気持ちにも気付き、気持ちを調整していく姿に丁寧に関わった。 ・自ら遊びや活動を創り出し、主体的な活動の展開ができた
	他クラスや異年齢との交流の促進 幼児同士が他のクラスや異年齢の子どもと関われるよう、様々な保育形態を取り入れている。	A	・農園活動、音楽会、運動会ごっこ、お店屋さんごっこ、遠足などの計画、各保育室への訪問や自由遊びの時間の交流など、積極的な交流が行われた。更に保育形態の工夫をしていきたい。
	個別の指導と情報共有 配慮が必要な園児に対しては個別の指導計画を作成し、情報交換を密にして共通理解をもとに対応している	B	配慮が必要な園児に対しては、個別指導計画の作成と共に、他教師との連携、保護者や各関係機関との連携を取り対応してきた。 ・専門的な視点からの助言を基に、個々に合った対応が出来た。指導計画の作成については、更に内容の工夫をしながら計画的に進めていきたい。

保育の在り方 幼児への対応	幼児の気持ちへの共感と受容 ひとりひとりのありのままの姿を受け入れ、幼児の気持ちに共感しながら関わることを大切にしている。	A	・一人ひとりの個性を理解し、思いを受け止める事を大切にしてきた。信頼関係の上に日々の関わりができるようにした。
	個と集団の関係を考慮した支援 発達段階や個々の特性に応じ、個と集団の関係を意識しながら、見通しのある関わりをしている。	A	・個の特性に応じた関わりや援助をしてきた。集団との関係でも個々への対応が必要であり、集団へ気持ちが向くような支援を行った。
研 修 と 研 究	自ら考え、決め、行動する力を育む 本園の教育目標Ⅱ『自ら考え、自ら決め、進んで行う子どもに』を重視し、幼児一人ひとりが自立的に考え、行動できる力を育む。	A	・どんな活動に対しても、子どもと対話することを大事に、子どもたちと相談し目的を見出しながら活動を進めてきた。 ・自分たちで遊び環境を作り出し、友達との関わりを深め遊びや活動を進める姿が見られた。
	人間として誠実に生きる力を育てる 「命を大事にして生きること」と「自分に対して誠実に生きること」を願い、遠い将来を見通した教育を目指している。	A	・日々の生活や友達との関わりを通して、自分や相手を思いやる気持ちを育んできた。また、小さな生き物と触れ合い命の大切さを感じてきた。 ・年長児は、千羽鶴作りや支援活動を通して、平和や困っている人への思いを深めた。
	自らの課題を自覚し、研鑽を深める 教師一人ひとりが自分の課題を自覚し、より良い保育を目指して自立的に研鑽を深めていく。	B	・講師を招いて園内研を行うなど、自らの課題を理解し知識向上に努めたが、講習等の参加は少なかった。来年度は時間、気持ち的ゆとりの中で、更に自分を高められるよう研鑽を重ねたい。
	同僚性を生かし、保育の質を向上させる 各教師の特性を活かし、効果的に協力し合いながら保育の質の向上を目指していく。	A	・音楽や運動など、各教師の得意分野を生かして合同保育を行い、効果的に保育を進めることができた。また、同僚関係が良好で、困った時も相談しやすく、助言を受けることでより良い保育につながった。 ・今後も遊び環境の工夫や年齢を超えた交流を通して、同僚性を活かした保育の質の向上を目指したい。
	協同性と表現を柱にした保育の実践 協同性と表現を大きな柱として、科学的かつ実践的な考察を有機的に結びつけて保育を進める。	A	・ごっこ遊びや劇ごっこを通して、思いきり遊びながら自分を表現したり、友達と協力する気持ちを育んできた。年長児は一人ひとりが意見を出し合い、互いを認め合う関係を大切にしながら、それぞれの良さを生かした劇作りに取り組み、充実した時間を過ごした。
	発達の見通しと連携を視点に伝える 子どもの発達の見通しや家庭・小学校との連携においても、協同性と表現の視点で情報を伝えていく。	A	・子どもの姿等、家庭と丁寧にやり取りをし、連携することが出来た。 ・小学校との連携においては、協同性の視点で情報を伝えることと共に、個人の課題、対応の仕方など指導上の重点を伝えてきた。これからも課題として更に深めていきたい。

※自己評価欄の記入方 A；十分に達成されている。B；ほとんど達成されているが、部分的に課題が積み残されている。C；課題が多く積み残され、ほとんど成果が上がっていない。

3 総合評価

年度当初の申し送りや日々の話し合いを通して前担任と連携を深め、子ども一人ひとりの思いや課題に応じた援助を行ってきた。活動の目的や意義を丁寧に伝え、自ら考え主体的に行動できる環境づくりに努めたことで、子どもたちは集団の一員としての心地よさや思いやりを育んだ。

農園活動や行事、ごっこ遊びや劇作りなど様々な活動を計画的に取り入れ、友達と協力し合う楽しさや表現する喜びを感じられる保育を展開した。年長児は千羽鶴作りや支援活動を通して平和や他者への思いを深め、自立や協同性も育まれた。

個別支援が必要な園児に対しては、個別指導計画を基に職員・保護者・関係機関と連携し、専門的な視点も取り入れながら丁寧に対応した。保護者との日々のやり取り、小学校への情報共有もきめ細やかに行い、連携を図った。また、同僚性を活かした合同保育や保育形態の工夫にも取り組み、保育の質向上を目指した。一方で、外部研修等への参加は少なかったため、来年度は積極的に学びの機会を持ち、更なる資質向上を図りたい。今後も、子どもたちが主体的に遊びや活動を創り出せる環境づくりを進め、一人ひとりの思いに寄り添いながら、保育の質を高めていきたい。

4 今後の改善点

改 善 点	具 体 的 な 取 り 組 み 内 容
・外部研修や他園見学への参加を増やし、専門性を高める	外部研修や他園見学については、年度初めに年間計画を立て、職員間で参加予定を共有することで実現性を高める。また、参加後は学んだ内容を記録し、職員会議等で発表・共有することで園全体の学びにつなげる。
・個別指導計画をより工夫し計画的に進める	個別指導計画は、定期的に話し合い内容を具体的に見直し専門機関の助言も取り入れ、実際の保育に活かしている。さらに計画的に話し合い振り返りの時間を確保し進めていく。
・同僚性を活かした保育の工夫で質の向上を図る	同僚性を活かした保育の質向上に向けては、計画段階から複数担任でアイデアを出し合うことで、多様な視点を保育に取り入れる。 今後も、子どもたちが主体的に活動を生み出せる環境づくりと、一人ひとりの思いに丁寧に寄り添う保育を大切にし、保育の質向上を目指して研鑽を続けていきたい。